

夢を応援基金 ～東日本大震災奨学金制度～ 2018年度 活動報告(最終年度)



「私たちが伝えていかなければ…」自分たちの経験を伝えることの大切さを感じた
ボランティアプログラム in 大分

制度概要

名称	「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」
奨学金	月額30,000円(給付、返還不要)
奨学生	1,097名（2011年9月奨学金給付開始時の人数）
目的	本奨学金は、2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「本震災」という。)によって経済状況が急変、または悪化し、就学継続が困難な状況にある、日本国内の高等学校及び高等専門学校(1～3年)、並びに高等専修学校に在籍する生徒に対し、大学など上級学校卒業までの間、奨学金を給付することにより、経済的不安を緩和し、学習効果を高めることを目的として寄与するものです。
運営体制	創設者：株式会社ローソン 運営主体：公益社団法人Civic Force 基金事務局（奨学生等との窓口業務）：特定非営利活動法人チャリティ・プラットフォーム *この事業は、Civic Forceの「中長期復興支援事業」の一環として運営されています。また、奨学金を含む運営のための資金は、ローソンによる店頭募金やマルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」で受け付けられた募金、Pontaポイント・dポイントでの募金のほか、Civic Forceオンライン寄付などで受け付けられた寄付により賄われています。
支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 月額30,000円の奨学金給付(返還不要) ■ 教育プログラム（ボランティア活動、奨学生交流会など）の実施によるサポート ■ その他被災地の生徒や学校からの意見も取り入れ、現地のニーズに合わせた様々なサポートプログラムを実施
対象者 *募集当時	高校進学を控えた中学3年生（予約奨学生）、高等学校、高等専門学校（1～3年）等に在籍していた生徒
応募資格 *募集当時	<p>下記(■)の条件をすべて満たし、かつ、AまたはBのいずれかに該当すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本震災時に家計を支える方が岩手県・宮城県・福島県に居住しており、同地域の学校に通学していた生徒 ■ 学校の推薦を受けることができる品行方正な生徒 ■ 夢をかなえるために、意欲と根性があり、東北の復興への貢献を希望している生徒 <p>=====</p> <p>A.本震災により家計を支える方が死亡・行方不明・負傷病気・失業等の被害を受け、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p> <p>B.本震災により居住していた住宅が半壊・半焼または床上浸水以上程度の被害を受け、または計画的避難区域になっているなど、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p>
支給期間	2011年9月より高校・高等専修学校卒業または専門学校・大学などの上級学校(大学院除く)卒業までの最大7年間 ※2011年度は、2011年9月から2012年3月までの7カ月間。以降、毎年進学時に更新手続き有り
注意事項	受給者は、奨学金の返還義務を負いません。また、奨学金の主たる提供者(株式会社ローソン等)への入社等その他の付帯義務を負うものではありません。 ※2019年3月末をもって本制度は終了しました。

「夢を応援基金」運営協力企業

教育新聞

The Education Newspaper

株式会社教育新聞社
運営のための様々なご協力をいただきました

Bridge For Smile

認定特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル
運営のための様々なご協力をいただきました

77 BANK 七十七銀行

株式会社七十七銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただきました

すべてを地域のために
東邦銀行

株式会社東邦銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただきました

岩手銀行

株式会社岩手銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただきました

第8期活動概要とご支援への御礼

2011年3月11日の東日本大震災発生から半年後の2011年10月、株式会社ローソン（以下、ローソン）からのお申し出により立ち上げられた「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」（以下「本基金」という。）より、第1回目の奨学金が奨学生1,097名に支給されました。本基金では、2,400名の応募の中から選ばれた1,097名の被災学生に対し、高校入学から大学を卒業するまでの最長7年間、奨学金を支給してまいりました。

第1回目の奨学金支給開始から約7年半――2018年4月、7回目となる更新手続きでは、117名の子どもたちが高校や上級学校（大学、短期大学、専門学校等）を卒業・修了し、社会に羽ばたいていきました。2018年度は76名の奨学生に奨学金を支給しました。1年間の奨学金支給を経て、2019年3月、本基金は皆様のご支援のおかげで、無事、第8期を終了することができました。また、同年3月をもちまして「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」は当初の予定通り、終了いたしました。

基金の創設者であるローソン、そしてローソングループの店頭募金にてご協力をくださった多くの皆様、オンライン寄付によりご寄付をいただいた個人の皆様に、活動のご報告と併せまして、心より御礼を申し上げます。

「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」の繰越金につきましては、奨学生・OB・OGの皆さんのご意見を踏まえ、主に東北の子ども・若者、そして復興を支援する活動に活用させていただく予定です。活動内容の詳細は弊社団体ホームページをご覧ください。<http://www.civic-force.org/>

卒業生からのメッセージ-1

2019年春、最後の奨学生76名が夢に向かって羽ばたきました。
寄付をいただいた皆さまへ御礼のメッセージが届いています。

「いつか自分の道で恩を返せるように」―岩手県出身

長い間、たくさんの温かいご支援ありがとうございました。おかげさまで、春から夢である高校の先生になり、高校野球の指導者になります。このご恩を忘れず、いつか自分の道で恩を返せるように精一杯頑張っていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



「福島の復興に携わっていきたい」―福島県出身

今まで、本当にありがとうございました。ここまで頑張ってきたのは夢を応援基金の支援があったからです。私は震災後も地元に残り、福島をずっと見てきました。これからは、今まで得た知識で福島県の復興に携わっていきたく思います。本当にご支援、ありがとうございました。

「復興の担い手に」―宮城県出身

中学から高校、大学と一貫してご支援をいただき、大変感謝しております。おかげさまで春から地元に戻り、就職します。故郷の地域資源を活かしながら、これからの復興の担い手になれるよう努力します。ありがとうございました。

「地元の医療を担う一員として恩返し」―宮城県出身

この奨学金のおかげで、私は自分の夢を諦めることなく、大学へ進学することができました。春からは地元の総合病院で管理栄養士として働くことが決まっています。地元で就職することによって、少しでも「復興」に関われるのではないかと考えています。今まで多くの方に、数えきれないほどの支援をしていただきました。今度は私が地元の医療を担う一員として恩返ししていけたらと考えています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、ご恩を忘れず精進して参りたいと思えます。

卒業生からのメッセージ-2

「誰かの夢を応援できる人になりたい」一宮城県出身

私は中学2年の時に被災し、自宅が居住不能となったため、避難所・仮設住宅での生活を送りました。日常が奪われ、大きな余震が続く中で不安な気持ちを抱えながら避難生活を送ったことは、今でも鮮明に覚えています。私は避難所において、公務員の方が、自身も被災されているにもかかわらず、私たち市民のために昼夜を徹して支援してくださっている姿を見て、「私も公務員となって、困っている人を助けたい。そして、災害に強い街づくりなどに取り組みたい」と考えるようになりました。しかし、目標とする公務員になるためには、高校や大学で様々な知識を身につけ、難関である公務員試験を乗り越えなければなりません。震災後、空身で仮設住宅へと移り、経済的余裕もない中で、自分の目指す道は正しいのか自問自答を繰り返す日々でした。中学3年の夏休みに入り、学校の先生と進路等についても話し合う三者面談において「夢を応援基金」を初めて知り、自分の夢を叶えるため、応募させていただきました。7年という長い期間にわたりご支援いただいたおかげで、高校・大学を無事に卒業でき、4月からは公務員として、働くことになりました。高校や大学で様々なことを学び、挫けることなく夢へ向かって進み続けられたのは、「夢を応援基金」があったからこそです。自分がなぜ公務員を目指し、どのようなことに取り組みたいと思ったのかということをお忘れず、職務に邁進していきたいと考えています。最後になりますが、「夢を応援基金」を通じ、ご支援いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。これからも夢を持ち続け、誰かの夢を応援できる人になりたいと思います。

「夢は災害にあった人たちを助けられるDMATになること」一福島県出身

高校から今まで夢を応援基金のお世話になってきました。この奨学金があったからこそ、私は毎日勉学に励み、夢である看護師を目指す毎日に集中することができました。この奨学金がなかったらきっと私は親に迷惑をかけ、バイトの日々で勉学も疎かになっていたかもしれません。奨学金を頂くことができたからこそ、私の今があります。私の夢は看護師となり、災害の多いこの日本で災害にあった人たちを助けられるDMATになることで、残すは国家試験のみとなりました。支援者の皆様のご恩に報いるように頑張りたいと思います。また、国家試験を合格したあかつきには私自身の夢をかなえられるように、いっそう努力していきたいと考えています。6年間ありがとうございました。このご恩を一生忘れません。私も誰かのために何か出来る人間になりたいです。本当に本当にありがとうございました。



(※DMATとは… Disaster Medical Assistance Team、通称「DMAT」。医師、看護師、救急救命士やその他事務員等で構成され、地域の救急医療体制では対応できないほどの大規模災害や事故などの現場に急行する災害派遣医療チームのこと。)

「看護師として地元で恩返しを」一岩手県出身

長年支援をしていただき、ありがとうございました。東日本大震災で、家や学校、多くのものを失った私にとって、夢を応援基金の奨学金は、勉学や生活をしていくうえでとても助けられたと感じています。東日本大震災から8年が経とうとしていますが、地元は震災当時からだいぶ復興し、震災前とは景色が変わってしまっても、新たな街づくりやコミュニティ作りが進められています。私自身も、4月からは幼い頃からの夢であった看護師として地元で働くことが決まりました。津波で町は大きく変わりましたが、そんな中でもたくさん助けてくれた町や人に、看護師として恩返ししていけたらと思っています。奨学金の支援をして下さったローソン様、また多くの募金をして下さった支援者の皆様にたくさんの感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

※2019年3月時点

サポートプログラム実施報告(1)

2018年8月「ボランティアプログラムin大分」を実施

九州北部豪雨（2017年）で被災した大分県日田市において、2018年8月1日～6日、6回目となる夏休みボランティアプログラムを実施しました。今回は岩手県出身の大学生1名、宮城県出身の大学生1名、福島県出身の大学生1名、計3名が参加。6日間に渡るプログラムを通じ、九州北部豪雨からの復興の軌跡や被災地の「今」を学びました。



崩れ落ちた山の斜面の前に、しばし言葉を失う



「あの日」と「今」が混在する日田市小野地区の風景

このプログラムではひちくボランティアセンター協力のもと、九州北部豪雨において大分県日田市小野地区で発生した大雨による土砂災害当時の様子や、その後の復興の状況について講義をいただきました。災害発生当日の様子を撮影した映像を見た学生たちが思わず声をあげてしまう場面も…。自分たちも「水」の恐ろしさを知っているだけに、この映像には大きな衝撃を受けた様子。

今回のプログラムにご協力くださったひちくボランティアセンターの松永鎌矢さんが、実際に映像で見た場所が今どうなっているのかを見に連れて行ってくださいました。川の対岸からあの日崩れ落ちた山の斜面と土砂に飲み込まれた建物が、当時の被害の大きさを物語っていました。発災から1年経った今もなお残る災害の爪痕を目の当たりにし、「ここで今自分たちにできることは何だろうか？」と自問する時間となりました。

2日目からは夏休み中の子どもたちの学習・遊びの場を提供する「子ども教室」で、子どもたちの先生役に挑戦しました。



「先生、ここ教えて!」「僕も!」「私が先!」と子どもたちに大人気の学生たち



教えることの難しさを改めて感じながらも、丁寧に説明



日田は日本で一番暑い場所として知られていて、湿度と気温が非常に高く、子どもたちが長時間外で遊ぶことが難しい環境です。しかも、仮設住宅やみなし仮設での生活、さらには小学校が被災したため近隣の中学校を間借りしているということもあり子どもたちは外で思いっきり遊ぶことができません。そんな子どもたちが誰にも遠慮せずに走り回れる時間を作ってあげたいと、短時間ではありますが外に出て巨大シャボン玉作りをしたり、山から切り出した竹を使った流しそうめんを楽しみました。学生たちは巨大シャボン玉を作るための道具作りから取り組み「どうすればシャボン液がたくさんつくれるか」とお互いに知恵を出し合いながら作業を行いました。学生たちが知恵を絞って作った道具のおかげでとても大きなシャボン玉ができ、子どもたちは大喜び。時間を忘れ暑さに負けず走り回る子どもたちにつられ、学生たちも童心にかえって楽しいひと時を過ごしました。

サポートプログラム実施報告(2)

活動の中で、西日本豪雨の被災地に送るための土嚢に子どもたちが思い思いのメッセージや絵を描く作業のサポートをしたり、子どもたちと一緒に遊んだり、1日1日があっという間に過ぎていきました。

「子ども教室」の最終日、この教室を運営されている方から、「もし可能であれば、学生さんたちに自分たちの被災経験について子どもたちの前で話してもらえないだろうか」という打診がありました。日田の子どもたちも、その被害の大きさは違えども同じように辛い思いをしている、その子どもたちに「辛い過去もあったけれど自分たちは今もこうやって生きているよ、こんな風にして辛いことを乗り越えてきたよ」という『道』を示してもらえたら、という思いからの提案でした。学生たちは、小学生の子どもたちを前に、あの日何があったのか、自分はどこにいてどんな夜を過ごして、それから今日までの日をどんな風に生きてきたのかを、それぞれの言葉で語りました。参加した学生のひとり、阿部さんは「私はあの日のことを思い出すのが辛くて、あの日の記憶を避けて生きてきたんです。でも今日初めて誰かの前で震災の日のことを話しました。話してみたら、なんだかすっきりしました。自分の経験があの子たちの希望になればいいな」と、感慨深げに話してくれました。



子どもたちの前で「あの日」のことを語る



漆喰塗りのレクチャーを受ける学生たち



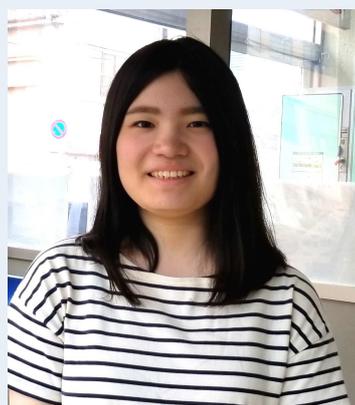
地域の方々と共に、いざ、漆喰塗りスタート！

今回は「子ども教室」のお手伝いだけでなく、ひちくボランティアセンターの拠点施設の壁に漆喰を塗るという作業も経験させていただきました。地域の方が先生となり、大人から子どもまで多くの方が参加し、ボランティア活動の中心となる施設の壁に真っ白な漆喰を塗る作業を行いました。

作業の後にはみんなで流しそうめんと花火を行い、別れの時を惜しみました。仲良くなったお姉さんたちが帰ってしまうのが寂しいのか、子どもたちは最後まで学生たちに寄り添って過ごしました。

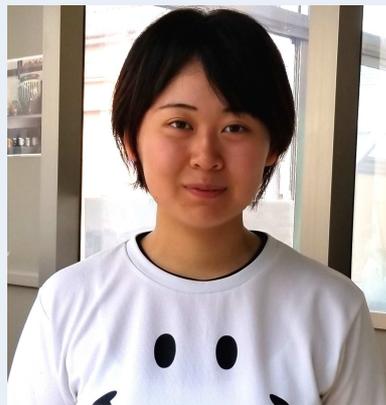
自分の中で消し去ろうとしていたあの日の記憶。それを誰かに伝えることが、今辛い思いをしている誰かにとっての生きる希望、一筋の光になるのだということを感じた、と学生たちは言います。学生たちの体験談を聞いた子どもたち、そして参加した学生たち、みんなが「伝える」ことの大切さを学んだ、有意義な6日間でした。

プログラム参加者の声



「これまでの恩返しを」
岩佐佳奈さん（宮城県出身）

今回これまでの恩返しが多すぎて大分のプログラムに参加しました。西日本豪雨で被災した愛媛県に土嚢を送るプログラムで、子どもたちが蛍の絵を描いていたのが印象的でした。豊かな自然の中で過ごす貴重な体験をさせてもらいました。



「被災の体験を子どもたちの希望に」
阿部祥子さん（岩手県出身）

子どもたちの前で、東北の震災から3日間親と会えず体育館で不安な日々を過ごしたことを話しました。あの震災以降、他の地域で災害があると聞くと被災した人はどんなに辛だろうかと考えます。大分で出会った子どもたちは予想していたよりも元気で活発でした。学校が被災して遊ぶ場所がなくなっても子どもたちがのびのびできるよう地域の皆が協力していました。



「今度は自分が被災地へ」
前川日菜子さん（福島県出身）

福島県相馬市で被災しましたが、これまでさまざまな支援に支えられてきました。学生最後の年に「今度は自分が被害にあった人の力になりたい」と参加を決めました。子どもたちは元気に見えたけれどきっとそれぞれの悩みがあるはず。成長していく過程で起きた災害の影響は大きいけれど、元気に育ってほしいです。

基金運営活動収支報告

「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」活動収支計算書 (2018年4月～2019年3月)

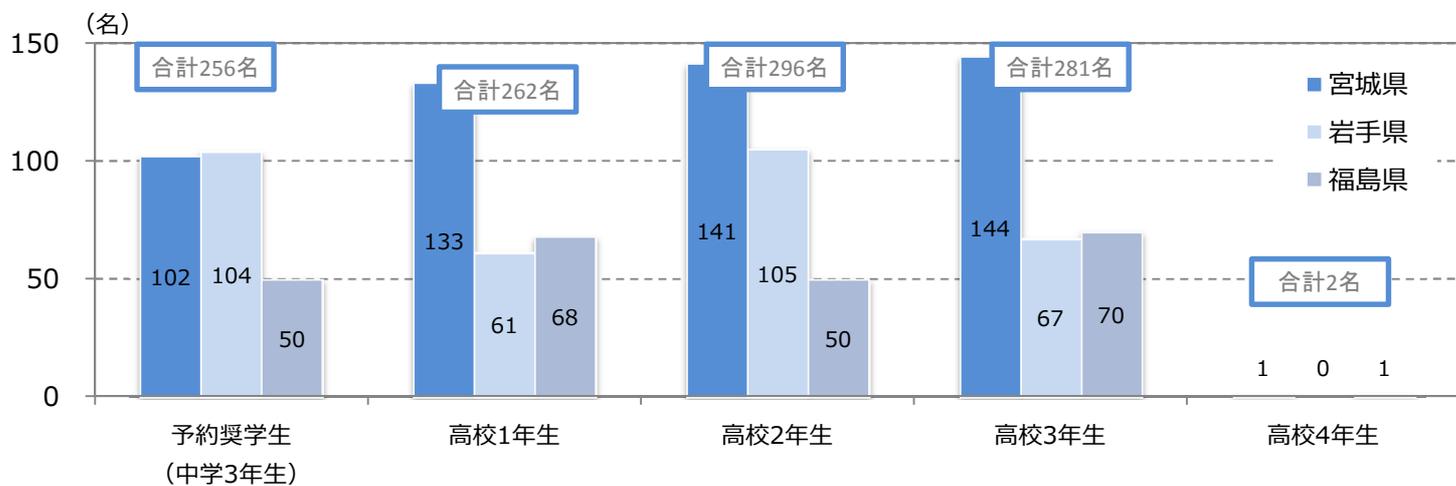
(単位：円)

昨年度からの繰越金		327,568,250
寄付金等収入		19,049,469
ローソングループ店頭募金	7,414,662	
ポイント募金（Pontaポイント・dポイント）	907,507	
Loppi募金	1,026,000	
ローソングループ社内募金	9,701,300	
その他収入		2,780
受取利息	2,780	
収入合計		19,052,249
奨学金支出		27,150,000
奨学金（76名）	27,150,000	
基金運営支出		14,794,275
基金運営管理費用（残務業務費含む）	14,782,503	
奨学金等振込手数料	11,772	
支出合計		41,944,275
繰越金*		304,676,224

* 繰越金：東日本大震災後の復興支援を継続し、主に東北の子ども・若者を支援する事業に活用させていただきます。
確定後、方向性を公表いたします。
事業の詳細は、Civic Forceのホームページをご覧ください。<http://www.civic-force.org/>

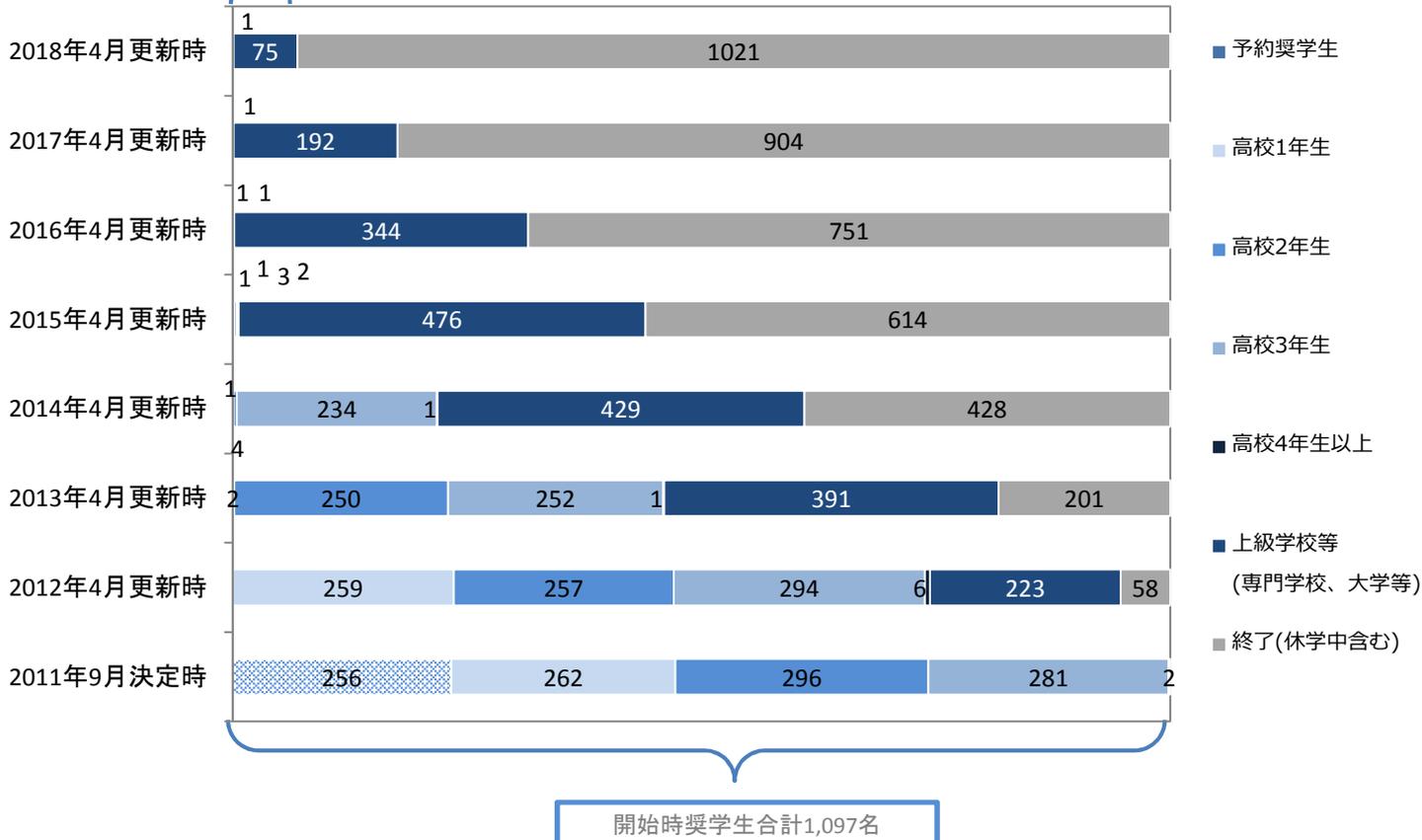
これまでの奨学生等の状況

奨学生決定数内訳 (合計1,097名。2011年9月末現在)



奨学生推移

2018年度奨学生合計76名



*各生徒数は、2012年4月の更新手続きにおいて、募集時の情報の訂正等があり、以前に公表されたものと数値が異なる場合があります。

これまでの主な活動

「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」の主な活動		
2019年	3月	「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」終了
	2月	基金残金の使途について奨学生およびOB・OGに対し、アンケートとヒアリング調査を実施
2018年	8月	大分県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2018年度更新手続きを実施
2017年	8-9月	熊本県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2017年度更新手続きを実施
	1-3月	図書進呈プログラムを実施
2016年	8月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2016年度更新手続きを実施
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソングループ各店で店頭募金を実施（一か月間） ■「夢を応援フォトコンテスト2016」を実施
	2月	仙台で開催された復興応援イベント「LAWSON Presents ドリームトークショー & クロストークディスカッション+ライブ」に奨学生が参加
2015年	8-9月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2015年度更新手続きを実施
	2月	ローソン店頭マルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」を通じた募金の受付を開始
2014年	7-8月	7月、岩手県で奨学生交流会を実施。8月、宮城県で奨学生交流会と夏の体験プログラムを実施
	4月	2014年度更新手続きを実施
2013年	11月	仙台で奨学生交流会を実施
	8月	東京で奨学生交流会を、宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2013年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■本基金の運営主体が公益社団法人Civic Force（シビックフォース）に移行 ■全国のローソンで、募金告知のため『1,097のありがとう。』（小冊子）を配布 ■全国のローソングループ各店で店頭募金実施（～5月末）
2012年	1月	奨学生のうち、高校2年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布
	5月	予約奨学生（申込時に中学3年生で、新高校1年生）への奨学金支給開始
	4月	2012年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～5月末） ■奨学生のうち、高校2年生及び高校3年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布 ■基金奨学生募集時に、申請書を提出した学生が在籍する高等学校及び高等専門学校に対し、自立支援ハンドブックを寄贈
	2月	ローソン主催による、被災3県の高校生を応援する「スペシャル講演&ライブ2012」を仙台市で開催。約700名が参加
2011年	12月	ローソングループ社内募金の受付開始（給与天引き制度）
	11月	旺文社様からのご寄付と寄贈により、奨学生募集時に申請書を提出した学生が在籍する高等学校、高等専門学校、中学校全358校に対し、『それでもいまは、真っ白な帆を上げよう』を2冊ずつ寄贈（合計716冊）
	10月	<ul style="list-style-type: none"> ■第1回目の奨学金を支給 ■奨学生とならなかった生徒には、支援金3万円とローソンプリペイドカード6千円分を進呈
	9月	1,097名の奨学生が決定（応募総数2,400名）
	7月	被災地（岩手県、宮城県、福島県）の高等学校、高等専門学校、中学校等に奨学生の募集を告知し、奨学生を募集
	5月	<ul style="list-style-type: none"> ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～8月） ■ローソン各店舗にて、寄付つき商品の販売を開始（その後随時実施）
	4月	「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」創設
	3月	東日本大震災発生

